

十、無碍道

「念仏者は無碍の一道なり。そのいわれいかんとならば信心の行者には天神地祇も敬伏し、魔界外道も障碍することなし、罪悪も業報を感ずることあたわず、諸善も及ぶことなき故なり云々」

これは歎異抄第七章の御文である。七章に出ているけれども、これは一章から十章迄のいわゆる顕正の部にあることであるから、真宗念仏の内的光景及びその外的生活の真相を示されたところの、誠に大切なる大文字である。歎異抄の骨目は何か。いわく、本願の宗教の開顕、いわく二種深信。それに違いない。かゝる本願真実の宗教を徹底的に体験的に表現せられたこの歎異抄に、もしこの七章を欠いだならばどうかであろうか。特に破邪篇に至ると、宿業の問題が取り扱われていて、我等衆生の生活は、善悪の一切が徹頭徹尾宿業を出ない。兔毛羊毛のさきにいる塵ばかりも造る罪の宿業にあらずといふことなし、とまで説かれてある。もしこれを念仏もなく唯観念的にとつたならばどうかであろうか。或は宿作外道とあやまり、或は安価なあきらめ気安めと誤解するものがあるかも知れない。

しかるにかゝる宿業の諦観も、信心の智慧によって自証内観せられるものであつて、それによつて、「念仏者は無碍の一道なり……罪悪も業報を感ずること能わず」と、宿業を感ずることによつて宿業の束縛より絶対自由無碍の虚空界に超越せしめられることを知らしめたもうのが、この章である。我等もしこの無碍道の一章を頂くことが出来なかつたならば、恐らくは、本願の宗教の真意を失い、聖人の念仏の御真意をうかがい知ることは出来なかつたであろう。

人生は苦惱そのものである。有碍の血みどろの中に生きてゆかなくてはならない。一山越せば又一坂、火の河の次には水の河。三界無安猶如火宅、善人も苦しみ、悪人も悩む。真面目に生きる者も悩み、不真面目なものも苦しむ。生死の苦海とは誠によくいわれたものである。

会えば怨憎会苦、別れて愛別離苦、父は子の為に泣き、子は父の為に怒る。兄は弟を裁き、妹は姉を罵る。嫁は姑を葬り、姑は嫁を悪む。有碍なる哉、有碍なる哉、この世。しかるに一切衆生はこの中であつて、唯運命の相殺、永遠の鬭争に理論づけまゝでして、無明流転を続けてゆく。この中に於いて久遠の真実を尋ね、永遠の光明を求めて、解脱の道に生きんとせられたところの聖賢により、その伝承の歴史的事実として、遂に我が聖人によつて「念仏者は無碍の一道なり。」と、横超の直道は我等の前に顕示せられたのである。この易行にして最勝なる念仏道こそ、我等の生きて往くことの出来る唯一の白道である。

親鸞聖人は観念的のものを仰せにならない。全身全霊を以て法を体解し、人生を具體的に受取つてその具体的な自証の声として御聖教を御残し下さつたのである。人生の苦惱が血と涙の中に地獄一定といわしめ、愚禿と名乗らせたのである。そしてそこまで手の届いた教法が本願の真宗であつたのである。かゝる天地において開いた

のが、無碍道としての念仏道であつたのである。信心即ち無碍道である。他力本願の宗教は、ついに有碍の人生にこの無碍道を展開して下さる唯一の真実であつた。

善導大師は、二河の譬において、浄土への白道を水河二河の間に開かれた。この白道こそ、今の無碍の一道でなくてはならない。しかるに我等凡夫は、一切の判断を貪欲におき、五欲の満足する日に笑い、五欲の満たされざる日に瞋憎する。この貪愛、瞋憎のみに終始してこの世を過すのである。つまり順境を求めて逆境を厭ふ、そのまゝが有碍の血みどろである。決して貪欲の満足が無碍道ではない。無碍道は、順境にも非ず、逆境にも非ず、実にその中間に開ける白道である。

白道とは何であるか。清浄願往生心である。行者の願往生心である。願往生の白道とはその体は何であるか。南無阿弥陀仏である。白道とは南無阿弥陀仏である。「南無は願なり。阿弥陀仏は行なり」、願行具足の名号即ち白道、その南無が、清浄願往生心、即ち大行弘誓大船に乗托せる心である。この心より外に無碍道はないのである。

誠にこの貪瞋二河の間に発起する願心のみが唯一の自己超越の立場である。「仁者この道を探ねて行け、必ず死の難無けん。もしとゞまらば即ち死せん。」との善知識の発遣のままに、道を探ねて直ちに進む、かかる行者には死はないのである。願往生心こそ横超の直道である。

この願往生心のみが一切を超えて無碍道に行くのである。他力の信心は、この願往生道に於いて金剛なのである。かくして無碍の白道も東岸発遣の教によつて生れるのであるから、無碍道を獲んとする者は、あくまで教法に忠実に順わなくてはならない。道は真実の教を聞くことによつてのみ開ける。

私の強い人は、我をあくまで通して、そこに生甲斐を感じようとする。しかし我を通して思うさまに振舞つても、それは無碍道ではない。我によつて虐げられた人々は皆泣いている。そしてその怨みはその身に返つて来て荒涼寂漠を感じないではいられぬであろう。

これに対して御一代聞書には、

「一。総体人には劣るまじきと思う心あり。この心にて世間には物を為習ふなり。仏法には無我にて候ふ上は、人に負けて信をとるべきなり。理を見て情を折るこそ仏の御慈悲よと仰せられ候」

とある。仏法は無我である。我を突張らないで、無我に信に生きる、道理が道理とわかれば私の情を折らして頂くことこそ私の御慈悲であるといわれるのである。私の行く道は険しい。人を苦しめ自ら苦しむ、有碍の黒闇である。無碍道は無我の世界に開けるのである。

世間通俗の世界では、性格のおとなしい人は善い人だとする。しかし羊のような弱い善人もまた当てになるものではない。弱い人は強い人に食われて、その心中愚痴を

出る事は出来ない。又さるべき縁になられたら、弱いが故に大罪惡を犯すかも知れない。弱い善人もまた険しい道を行かねばならない。

真の無碍道は、強弱を超えて開くのである。強いからとて無碍道だと思つてはならない。弱いからとて無碍道が拒まれていると思つてはならない。道は強弱を超えて開くのである。

世には世渡り上手な人があり、又下手な人がある。弁舌のよい、小才のたけた人は世にもてはやされ、如何にも無碍道を行くが如くである。しかしそれは決してほんとうの道ではない。道心の中に衣食ありといわれるが、衣食の中に道心ありとはいわれない。

宗教家があまりに上手であるのは危険なことである。仏徳が現われたのか、その人の上手が出ているのか、初めは見さかいがつかない。しかし、手練手管の上手は美しく末通るものではない。上手に渡る者は、必ず壁に向つて合掌しないで問題を逃避する。正しいとならば荆の道をも行き、真実とならば万人の嘲笑をも意とせず、一貫しようとする信念がない。常に世俗の評判称讃を気にし、名利の成就のみを気にする。妥協を事とし、問題や苦難を逃避するが故に、その生き方は抽象的であつて、誰をも動かす力を持たない。

上手な世渡りをする人は打算的であつて節を守らない。初め正法に忠実に見えても、それによる利益漸く身をつゝむに至れば、本末顛倒して御利益のぬるま湯にひたつて、聞法精進の火をたくことを忘れ、名利を追うて横に歩み、如来招喚のままに生きぬかないで、やがて如来聖人及びその教法さへも尻の下に敷いて、その恩徳を私して天魔破旬の子となる。

誠に恐るべきは、知らずして人間の小才に誇る自己肯定の心である。恐るべきは自力の心、名利を追うて横にされることである。如何に俗衆にもてはやされて坦々たる大道をゆくが如きも、無碍道ではない。

もし仏の正道を尋道直進すれば、迫害非難に会うかも知れない。しかしそれを貫けばやがて敵は沈黙するであろう。更に一貫相続して節をまげなければ、遂に敵の讚嘆する人となるであろう。

念仏して更に正法に聞け、常に正法に忠実に随順せよ、如来招喚の聞えたもうところ、無碍道を信証するであろう。無碍道即ち金剛心、この心即ち如来本願力の顕現廻向に外ならない。如来の智慧ところ実の外ならない。

(昭和二十四年元旦に當つて、特にこの無碍道に就いて頂き、本年の精進目標とす。御同胞各位と共に念仏して、無碍道の往生人となろう。)